

キャンパスの建物の記憶

案内人	富田 知恵子【とみだ・ちえこ】
案内人紹介	同志社社史資料センター社史資料調査員

2023年度春のDoshisha Spirit Weekキャンパスめぐり隊は例年よりも少し早い5月15日（月）に開催された。

今回は初の試みとして、2023年3月14日から4月28日までハリス理化学館同志社ギャラリーで開催していた第28回企画展「『社史』と呼ばれて60年 Keep! ―社史は宝箱―」の展示の一部を残しておき、キャンパスをめぐるルートの途中で、参加者に見ていただいた。この展示は、社史資料センターの前身である社史資料編集所が開設されてから今年が60年にあたることを記念して開催したもので、現在に至るまで収集、保存されてきた同志社の姿を示す様々な資料、特に紙以外の資料を展示した企画展である。

その中で、今回のキャンパスめぐり隊のタイトルともなっている「キャンパスの建物の記憶」と題した章があり、キャンパスに存在したが、現在は失われた建物の一部や銘板、看板などを展示していたが、この展示部分を残しておき、見学に供した。実際に現物、モノを見ていただき、今では見ることのできない建物の存在を感じていただければ、という意図である。

また、今年から2026年にかけては、今出川キャンパスの西側部分の景観が大きく変わる工事が予定されている。今出川図書館の建て替え工事である。現在の建物を取り壊し、同じ場所に新しく図書館が建つことになっている。現図書館は8月上旬には閉館して、工事の準備に入る予定となっている。そこで、今回のキャンパスをめぐるルートは、明治時代に建てられた煉瓦造りの建物をめぐりつつ、今出川図書館の周辺をまわり、その景観や周囲の展示物などを重点的に案内して現在の姿を記憶にとどめていただく。つまり、建物の記憶を残す関連資料を見て、在りし日を想起してもらうことと、変わりゆく現在の姿を記憶に残す、この二つを今回のキャンパスめぐり隊の目的とした。

礼拝堂～彰栄館

キャンパスをめぐる出発地点は礼拝堂である。礼拝堂は、彰栄館に次いで1886年（明治19年）に建てられた。新島襄が「此礼拝堂ハ我同志社ノ基礎トナリ又タ精神トナル者ナレバナリ」（新島襄全集編集委員会編 『新島襄全集』1 同朋舎出版 1984年 105頁）と演説で述べたように、キリスト教主義を根幹とする同志社の中心となる建物である。功労者肖像保存規程により、礼拝堂内部には、同志社に功労顕著な人物、同志社の出身者であって社会に貢献した人物、また独力で建物を寄附した人の肖像をかざっている。新島襄の肖像が壇に向かって右側に掛けられ、歴代総長らの肖像が壁に並ぶ。

礼拝堂の外に出ると西側には、彰栄館がある。彰栄館は、今出川キャンパスで煉瓦造りとしては最初に建てられた建物である。1884年（明治17年）に竣工した。キャンパスでは、学生・生徒数の増加により校舎の建て替えや増築などがたびたび行われ、彰栄館もそのままの姿を残して現在に至ったわけではない。1951年（昭和26年）に彰栄館新館が増築され、彰栄館の北東部と接続された。その後、長期にわたり、この状態（写真1）であったが、中学校が岩倉へ移転した2010年（平成22年）には建築当時に復元した現在の姿に戻された。

ハリス理化学館展示

礼拝堂の東側に立つハリス理化学館は1890年（明治23年）、同志社の創立者である新島襄が亡くなった年に建てられた。当初は屋上に天文台があったが、翌年10月に起こった濃尾地震の後、地震による倒壊を危惧して取り壊され、この建物も建築当時とは姿を変えている。現在はその名残として、天文台に続いていた螺旋（らせん）階段が残る。

2階企画展示室では、展示は終了したが、一部残していた展示を見学していただいた。展示品は、時計針（彰栄館時計台初代）（写真2）、旧致遠館の鬼瓦（写真3）と上棟札、厚生館由来石板、自修館銘板、育真館の煉瓦（写真4）、同志社商業高等学校の振鈴（しんれい）（写真5）、フレンドピースハウス欄間、タイプライター（アーモスト館）、寮の看板、鍵などである。旧致遠館、厚生館、自修館は取り壊されて現在はない建物である。寮のうち鴨東寮、北志寮もすでになく、松蔭寮はリニューアルされている。

彰栄館の時計は、文字盤が白地の頃もあったようであるが、現在は、緑地の文字盤に金色の文字で初代の時計と同様の色になっている。ただし、1979年（昭和54年）から1981年（昭和56年）にかけての修理工事によって、重錘式（錘が垂れ下がる重力で動く）時計から電気時計となった。初代時計は、アメリカのセス・トーマス社製で、竣工から3年後の1887年（明治20年）9月に取り付けられた。東側の入口の2階に、現在もその動力装置が保存されている。製造プレートには「MADE BY Seth Thomas Clock Co. THOMASTON CONN. U.S.A.」「MAY5 1887 A. S. HOTCHKISS」と刻まれており、セス・トーマス社のA. S. ホチキスによって1887年5月に製造されたことがわかる。

旧致遠館は、1915年（大正4年）9月に起工、12月28日に上棟した煉瓦造2階建の校舎である。1、2階あわせて9室の教室があった。ヴォーリズ合名会社の設計と推定されている。瓦葺の煉瓦造の建物であった。展示している鬼瓦はその屋根を飾っていたものであるが取り外されて、社史資料センターで保存されている。2019年（令和元年）から2021年（令和3年）にかけて建て替えられ、現在は同じ場所に新しい致遠館が立つ。

新町キャンパスの地は、元は1917年（大正6年）に設立した日本電池株式会社の今出川工場があった場所で、手狭になったキャンパスの教室不足を解消するために、1959年（昭和34年）に同志社が購入した。育真館は、元は日本電池株式会社の煉瓦造平屋建ての建物で、土地とともに購入された後、同志社では体育施設として使用していたが、2021年（令和3年）から2023年（令和5年）にかけての建て替えにより跡地には、2023年5月に新創館が建てられた。話は戻すが育進館の建物には「三石耐火煉瓦株式会社」と刻印された耐火煉瓦や大阪窯業株式会社の刻印の煉瓦が使用されていた。三石耐火煉瓦株式会社は岡山県にある、明治時代創業の煉瓦製造及び販売会社である。大阪窯業株式会社はやはり明治時代から続く会社で、堺市に大きな工場があった。

今回、現図書館の建て替えによって景観が変わるが、現在の図書館が建つ際にもこの場所にはいくつかの建物が建っており、図書館新築によって取り壊しや移築がされている。

銘板を展示している自修館という建物は、元は弘風館と呼ばれる建物であった。現在の2代目弘風館の建設に際して、その場所にあった初代弘風館（写真6）が1957年（昭和32年）に現在今出川図書館が建っている場所へ移築、改築され自修館と称した。1968年（昭和43年）に解体されている。

展示物の中に「同志社商高」と記された振鈴（振り鐘）（写真5）があるが、この「同志社商高」とは、1948年（昭和23年）から1976年（昭和51年）に存続した同志社商業高等学校のことである。昭和20年～30年代頃まで、学校では授業の始まりと終わりを知らせるため、職員が鐘を鳴らして校内をまわった。商業高等学校は聚芳館（しゅうほうかん）という建物で開校したが、この聚芳館が建っていたのが、現在図書館が建つ場所である。後ほど図書館の北側に立つ商業高等学校の記念碑へも案内した。

また、キャンパス内の建物ではないが、学生たちが生活していた寮の看板や鍵、タイプライターなどの展示物も当時の建物の写真パネルとともに見ていただいた。

クラーク記念館周辺・茶室

ハリス理化学館の東側に立つクラーク記念館は、1894年（明治27年）に開館した建物である。建物の東側と南側には、それぞれ「第一寮跡」「第二寮跡」の石碑がある。第一寮、第二寮は、今出川キャンパスに最初に建てられた建物で、クラーク記念館の建物が建てられるにあたり、移築された。

また、クラーク記念館の北側には寒梅軒と呼ばれる茶室があるが、これはもともと五撰家の一つである二条家の邸宅にあった建物である。1951年（昭和26年）に現在図書館がある位置へ移築されたものであるが、さらに1967年（昭和42年）に場所を移し、現在の場所に落ち着いた。寒梅軒は今出川通りに沿って公家の邸宅が建ち並んでいた頃の名残を伝える数少ない建物である。

図書館周辺

1973年（昭和48年）に竣工した現在の今出川図書館は、今年で50年を迎える。初代図書館は1887年（明治20年）に竣工した有終館である。二代目図書館の啓明館は、1915年（大正4年）に書庫棟が、1920年（大正9年）に本館が竣工。現在の図書館は三代目である。ハリス理化学館展示室でも説明したように、図書館が建てられる前に立っていた建物は、移転や取り壊しがされた。

そのうちの一つである啓真館（写真7）は、元は1874年（明治7年）に設立された華族会館の建物である。宝鏡寺や旧閑院宮邸などを転々としていた華族会館は、1879年（明治12年）から旧徳大寺家の建物に落ち着いた。翌年には閑院宮家から車寄せと門が移築され、大規模な工事が行われるが、その時、移築された門が、大学院門である。建物は大正時代にも大きな改築、増築が行われ、華族会館京都分館として使用された。戦後GHQにより接収されるが、1952年（昭和27年）に同志社が購入し、啓真館と称して主に大学院の授業などに使用した。1972年（昭和47年）に解体されている。

先ほどハリス理化学館の展示で少し話にでたが、同志社商業高等学校の授業に使用された聚芳館（写真8）も、現在図書館が立つこの付近にあった。その後、場所を新町キャンパスに移して授業はおこなわれるが、建物は1972年（昭和47年）に解体され、1976年（昭和51年）3月に同志社商業高等学校が閉校する際、開校したこの場所（図書館玄関のスロープ入口）に記念として「一粒の麦」碑が建立された。

「一粒の麦」碑の南側となるスロープの奥には、南蛮寺の礎石が展示されている（写真9）。南蛮寺は16世紀に現在の京都市中京区姥桜町付近に建立されたイエズス会の教会で、1973年（昭和48年）に同志社大考古学研究室により発掘調査が行われた。この礎石は、土地の所有者から寄贈されたものである。

最後に、啓真館の飾り金具、獅子口、館名が書かれた銘額を見ていただく。先ほど見た大学院門とともに閑院宮家から移築された車寄せの飾り金具、獅子口と、1952年（昭和27年）建物購入当時の校友会長によって書かれた銘額である。現在は図書館の外、西側に展示されている。獅子口の経の巻と呼ばれる部分には閑院宮家の紋が刻まれており、1867年（慶応3年）

に瓦が作られたことを示す銘文も刻まれている。獅子口はもう一点あり、図書館2階中庭にも展示されている。

以上、今回のキャンパスめぐり隊では、建物の記憶を残す資料をみるとともに、現在の景観、建物を記憶としてとどめる、という趣旨でルートをまわった。図書館の建築過程によりキャンパスはまた変わっていくが、今後も、その風景を多くの方に記憶として残していただきたい。

2023年5月15日 同志社スピリット・ウィーク春学期
今出川校地「キャンパスめぐり隊」記録

写真1（同志社社史資料センター所蔵）

写真2（同志社社史資料センター所蔵）

写真3（同志社社史資料センター所蔵）

写真4（同志社社史資料センター所蔵）

写真5（同志社社史資料センター所蔵）

写真6（同志社社史資料センター所蔵）

写真7（同志社社史資料センター所蔵）

写真8（同志社社史資料センター所蔵）

写真9（同志社社史資料センター所蔵）

※写真の表示はホームページでは省略します。